

シリーズ 酪農学園の精神 (9)

酪農学園の建学の精神に育てられて

酪農学園大学

名誉教授 小山久一

酪農学園の建学の精神に育てられて

はじめに	2
一 酪農学園大学の学生として	3
二 委託実習と酪農学園大学の力	4
三 学生時代の礼拝と先生方の情熱	7
四 家畜繁殖学研究室	9
五 家畜繁殖学との出会い	11
六 苦労した板書	12
七 希釈液と希望の希	14
八 見えない背中に入れ墨	15
おわりに	17

はじめに

私は平成一三（二〇一二）に酪農学園を定年退職し、現在は特任教授として大学一年生を対象とした基盤教育科目の一つである「建学原論」を担当している。この特任教授も今年度で終わり、酪農学園にはこの期間を含め、四一年間在職したことになる。この間、ケガや大病で入院することもなく、元気で過ごせたことに自分のことながら感心し、教育・研究の世界においてこそ健康であることの大切さを痛感している。

今回、酪農学園大学同窓会校友会がシリーズで発行している「酪農学園の精神」への原稿依頼を引き受けたが、何か特別立派な考えがあるわけでもないで、読んでいただく方々に申し訳ないとの気持ち強い。しかし、学生の中から感じていた酪農学園の底力に育てられてきたことへの感謝の気持ちを込めて思い出話を少々させていただきたい。

一 酪農学園大学の学生として

酪農学園大学に入学したのは昭和四三（一九六八）年である。入学式は当時の木造の学生会館で行われ、礼拝形式の式典に戸惑いながらも申し訳程度の小さな声で賛美歌を歌い、黒澤西蔵先生が紹介する教員を見つめながら、酪農学園大学のどこに大学らしさがあるのかと大学探しをしていた。私の大学探しはこの後しばらく続くことになる。

昭和四三年頃の学内の施設はほとんどが古い木造建築で最高学府である大学をイメージさせる様な建物はなく、また、学内には大学生の象徴であった角帽をかぶる学生もすでになくなり、大学生になった気持ちにはなかなかなれなかった。しかし、授業に出ていると試験は別として学問とはなんと理路整然としていて謎解きの様で面白いものだと思うようになってきた。

また、実験・実習で見た顕微鏡下の世界にも興味を持つようにもなり、さらに娯楽の少ない寮生活では本を読むことに集中できた。

やがて次第に大学探しが入学したときとは異なった方向に進んでいった。

この時読んだ本の一つに授業で紹介されていた岩波文庫の内村鑑三著「デンマルク国の話」がある。旧漢字と小さい文字に苦勞しみながら読んだ記憶がある。学生の時どれだけ理解できたか定かでないが、当時の本は今も持つており、読むたびにあたかも内村鑑三の講演を聴いているようで不思議とワクワクする感じは変わらない。

二 委託実習と酪農学園大学の力

世の中には大学の名前で学生の能力を判断することがある。入学間もないころは酪農学園大学にはそのようなネームバリューはないと思っていた。従っておのずと自分のことは自分ですること、大学にいるうちは全てが勉強であり、努力の代償として将来が決まってくると考えていた。しかし、やがて酪農学園大学の真の力は他の大学と異なり、別物であると感ずる時が来た。やっとな酪農学園大学の特色に気付き始めたのである。

昭和四四（一九六九）年の二年生の夏休み、委託実習と呼ばれていた酪農

実習のために道東の計根別町の酪農家に二十日間入った。この実習の前に酪農学科は短期間の特別な宿泊実習を計画し、参加学生を募集していた。宿泊実習では学科の教員による講義と実習が大学農場を中心に実施された。恐らく、送り出す学生の技術の向上と不安解消が目的であったと思われるが、まだ専門もろくに知らない二年生が実習に行くのであるから、酪農家から何らかの要望があったのかもしれない。私は特に不安はなかったが、実習経験は多い方が良くと考え参加した。学生は確か全員で六人程度であったが、牛舎内作業の全般と乳房炎の検査法、ロープワーク、牧草の種類等、実に中身の濃いものが集中して展開され、先生方の熱意が直に感じ取れた。実習終了後ただちに農家に入った。

実習先のある計根別駅には夕方に着き、当時は当たり前であったが迎えもなく五キロメートル近い砂利道を歩いて目的の酪農家に到着した。ちょうど、搾乳を始めるところで、休む間もなく早速牛舎に入り、二台しかないミルクカーの一台で搾乳をするよう指示された。最初は乳房が垂れ下がり、土がこびりついた乳牛をあてがわれ、ミルクカーをつけるのに大変な牛であった。何とか

実習で習った手順に従いゴミやワラを吸い込まないように注意しながらミルクを着しふと横を見ると、通路にしゃがみ込んでじっとこちらを見ている主人と、いつ来たのか分らなかつたが隣の酪農家の二人がいた。自分では問題なく操作できたと思つていたが、大学以外では初めてのことで、何を言われるかと急に不安になつた。無事、一頭目の搾乳が終わつたところで、主人は次に搾乳する牛を指示し、それらの搾乳を任すと言つた。確かに主人は実習中は搾乳に来ることはなく、私とその奥さんと二人だけの搾乳作業となつた。

この時、自分の搾乳技量を酪農家に認めてもらへたと思つていたが、個人の問題ではなく、酪農家が酪農学園大学に求めている教育力を私のミルク操作を通して確認していたのである。ミルクカーひとつ扱えないような教育では酪農学園大学は話しにならないのである。確かに酪農家にとつて学生は労働力として貴重な存在であつたが、同時に酪農学園大学が酪農の将来を担う人材の教育を展開できていくかどうかはもつと重要であつたと思われた。

この実習を無事に終了したときに実感したのは、ある種の自信と自分の中

に染み込んできた酪農学園大学の真の力であり、これを契機にやがて学生生活において、頼りになるのは自分だけであると思ひ込んでいたのが大学の教育への信頼や建学の精神への愛着に変わって行くのであった。

教員になって、学生が委託実習を終えて帰ってきたとき、その多くが身体だけでなく、一回りも二回りも大きくなったように見えたのは、私が学生の時に感じたように、彼らも自分への自信と酪農家に信頼されている大学への誇りを感じ取ったからだと思っている。

三 学生時代の礼拝と先生方の情熱

キリスト教の礼拝はそれまでに経験したことはなかったが、大学での礼拝は強い印象を受けた。教育がキリスト教の精神に基づいていることは分っていたし、納得もしていたが、最初のころはアーメンというのが何やらキリスト者特有の暗号のようで苦痛であった。しかし、あるとき賛美歌を指導していた先生がアーメンとは「その通りです」という意味であると説明してくれ

た。この一言が、私の苦痛を取り去った。それ以来、礼拝での祈りに安らぎが得られるようになってきて、最初は出席を取るのに参加していたものの、自ら行くようになった。礼拝についてはその意義を疑問視する学生もいたが、彼らも礼拝の終わった後の心の軽さは私と同じで、聖書の言葉に励まされ力づけられたと思っっている。

一方、当時の先生方は学生に対して、それぞれの専門とは別に何かを伝えようと連携し、情熱的で一生懸命であったような印象を持っている。それが私にとっては新鮮で、粗末な教育環境の中でも先生方への信頼を深め、さらに大学への信頼へとつながっていった。確かに敬虔けいけんなキリスト者の先生は多かったが、それだけではないことが後になって分った。本学の松井幸夫名誉教授によると当時の教職員は、「酪農学園大学および酪農学園短期大学は、自分たちの生活の場であり、こここそが自分たちの職場・生き甲斐の場であると言う自覚と一体感がありました」とある（シリーズ酪農学園の精神Ⅰ）。まさに、生き甲斐や人生をかけて教育に臨んでいたことが学生に伝わってきたのかもしれない。自分も教員としてスタートしたとき「こここそが自分

の生き甲斐の場」と考えていたことは事実であり、この考えを維持できたこととで定年まで教育・研究に打ち込めたと思っっている。

四 家畜繁殖学研究室

戦後の酪農界において、急速な技術革新が見られたものの一つに家畜繁殖学における人工授精技術と理論がある。乳牛の人工授精が北海道を中心に普及した背景には、昭和十一（一九三六）年から十五（一九四〇）年にかけてまん延し、酪農界の脅威となった乳牛のトリコモナスがある。トリコモナスは種雄牛によって媒介され、トリコモナス原虫は交尾によって雌牛に移行して、流産や子宮内膜炎、膣炎などを発生させ、当時は治療が極めて困難な病気であった。この解決法として戦後、交尾を伴わない人工授精が導入されたのである。しかし、人工授精が普及してくると種雄牛を農家から特定の施設（授精所）に集中させて管理できること、また能力の高い精液を使った改良が進めやすいことなどがあって畜産、特に酪農では無くしてはならない技術と

なっていた。酪農学園大学・短期大学の家畜繁殖学研究室も創立から凍結精液の研究に取り組んでいた。

家畜繁殖学は、家畜育種学や家畜飼養学の一部門として取り扱われ、畜産学の中にあつては特に注目されることは少なかった。しかし、牛の人工授精が液状精液から画期的な凍結精液に移行する過程で、精子生理や受精のメカニズムが解明されるようになり、学問体系として独立するようになった。

家畜繁殖学研究室は小山邦武先生によって昭和四一（一九六一）年の中頃に創設された。小山先生は畜産学第二研究室に所属していたが、そこから独立した形で研究室をつくつたのである。その前年には学生からの要望もあつて検討はされていたようであるが、設立とともにゼミ生や卒論履修者が集まり、凍結精液の研究が開始されている。当時は牛ではなく、第一号の卒論の題名が「豚精液の凍結保存に関する研究」が示すように技術的により難しかった豚の凍結精液による人工授精に取り組んでいた。内容は凍害保護物質といわれていた糖類の添加量や錠剤化による凍結方法について取り組んでいたようである。

五 家畜繁殖学との出会い

私が家畜繁殖学研究室を訪ねたのは大学三年生の時で、すでに小山邦武先生は退職され、酪農学園大学学長と酪農学園理事長を務められた平尾和義名誉教授が着任して間もないころであった。

研究室を（写真1・2）訪ねたのは、蔵書のF.S.E.ハーフェツ著（西川義正訳）の「家畜・家禽繁殖学」を借りるためであった。この本を開いたとき上質の紙に印刷された図・表や写



写真1
創設当時の家畜繁殖学
研究室の表札

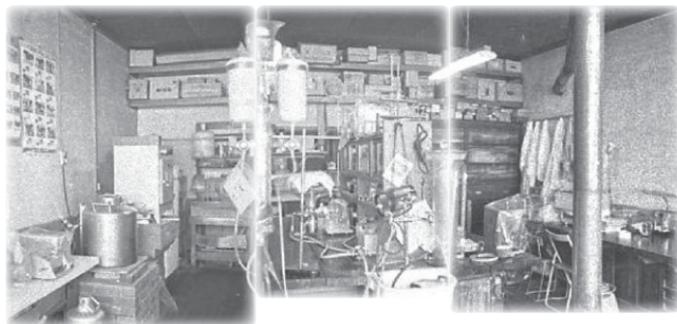


写真2 昭和47(1972)年頃の家畜繁殖学研究室(3枚組合せ)
左にステンレス製の凍結精液保管器、右に薬品戸棚と、カバーで覆われた四角い凍結精液作製器、右中央の太い筒状のものは石炭ストーブの煙突

真に圧倒され、家畜繁殖学のとりこになった。この本は、研究室に届いたばかりで、先生も読んでおらず、ましてや貸し出したことはなかったようである。借用の条件は大事に扱うことと、速やかに返却することであり、借りるのは申し訳ないと判断し、苦しい学生生活であったが購入した。この本が私を家畜繁殖学へ導き、その後の人生に大きな影響を与えた専門書の一冊である。本は自分の金を出して読めという話を聞いたことがあるが、確かに自分で買った本は集中して読むことができるようである。

六 苦勞した板書

酪農学園大学の教員（助手）に採用されたのは昭和五〇（一九七五）年である。酪農一号館（現在のC二号館）ができた直後で、将来は口の字型に建築物を増築するために大きな庇のある玄関を二か所設けたと聞かされていた。家畜繁殖学研究室は広い実験室とゼミ室のある三階に移転し、卒論を履修した学生には机が与えられていた。私も実験室に机を置き、大学院出たてであつ

たが、教員としてスタートを切ったのである。

教員になって苦勞したのは板書で、あたかも崩した文字のように見せて書いていたが、漢字の筆順に自信がなかっただけである。当時は漢和辞典を引いて調べていたが、時間のかかる効率の悪いものであった。そのうち筆順辞典が出版され、さらに電子辞書になり筆順解説が付き本当に助かった。筆順にこだわったのは、字が下手だったからで、正しい筆順を心がけるようになってから、それなりに字形が整い、リズムが出て、間違い字も少しは減って、板書も楽しくなってきた。

筆順を注意するようになってから、学生やほかの教員の筆順も気になりだした。ある先生が最終講義で黒板に大きく「健土健民」と書いたが、書き始めた直後から文字に違和感があり、その時の話が何であったか思い出せないほどである。それは「健」の筆順がイ+互+聿の順になっていたからである。これは多くの人が知っているように、イ+聿を書き、最後に両者の間に互をいれてすこやかに長くのびる様子を表さなければ、たとえ書きあがった文字が「健」であっても「健」にならないのである。すなわち筆順が正しくなけ

れば「健土健民」は生きた理念として伝わってこないのである。

私は若いときに教壇に立つてから定年まで、漢字が思い出せなかつたり、筆順を間違えたりを何度か経験し、本当に学生の前で板書することの怖さを痛感している。

七 希釈液と希望の希

牛の精液は精子濃度が高く精液量が少ない。そこで、受胎に必要な精子濃度まで希釈して多くの雌牛に人工授精を施すことになる。この希釈に用いる溶液を希釈液とよび組成の基本は鶏の卵黄とクエン酸である。人工授精でこのことを話しているときに、はたと気が付いた。希釈液の「希」でなぜ薄めることになるのか。解字によるとメ+メ+巾からなっており、縦糸+横糸+縦糸+緯糸+巾で織った布を表している。すなわち、織った布を透かして見たとき、少し離すと向こうは見えないが、目を近づけてよくよく見ると織り目から向うが微かに見えるということであった。牛凍結精液の容器にはミリ

リットル当たり三千万程度の精子が封入されているので精子が見えないほどではないが、この希釈液が多く、この乳牛の改良に貢献したのは間違いないのである。

常々学生には、つらいことがあっても希望をもって耐え抜くことが大事であると話している。聖句に「艱難かんなんは忍耐を、練達は希望を生む」とあるように、希望は簡単に手に入るものではないが、希望の「希」が示しているように、見えない望みでもしっかりと目を見開き、諦めずによくよく見ていると微かに見えるようになる。そのことを信じ、日々の努力を大切にするようにと話している。学生に人工授精の希釈液の「希」と希望の「希」のつながりを話しても理解してもらえないようであるが、私なりの表現法として、私の心の中では縦糸＋横糸＋縦糸＋緯糸＋巾でしっかりとつながっているのである。

八 見えない背中への入れ墨

学生の時は日本中の大学で学園紛争が盛んであったが、多くの大学で学園

祭が行われていた。ある大学のポスターの「背中のいちょうが泣いている…」という文句に強烈な印象を受けた。学生の背中にその大学のシンボルであるイチヨウの葉の入れ墨が入っているのである。親から授かった体に彫り物をするとは何事かといわれていた時代である。この時の印象がその後も残っているとは思ってもいかなかったが、教授職に就いたころ、それなりに自分の教員生活を振り返り、また反省することが多くなってきたとき、自分の背中は気になりだした。学生には、ややうそぶいた言い方であるが、俺の背中には「酪農学園大学卒業」の入れ墨が入っていると話したことがある。そしてこれは見ようとしても見えないし、消そうとしても消せない。さらに死んで灰になっても消えずにしっかりと彫り込まれていると。自分の教員生活を振り返ってみると、この「酪農学園大学卒業」を背負っていることで何度も助けられ、また時には苦しみ迷ったこともあったが、これを誇りに思っている自分に気付かされるが多かった。

おわりに



昭和47(1972)年頃の春先の白樺並木

私は、酪農学園大学の教員に採用された後、そのほとんどが教育の難しさに悩み続けていたような気がする。とくに三愛精神については黙って触れなければ何ら悩むこともなく過ごすことができたが、キリスト教の精神に基づく三愛精神の教育を受け、賛同して教員となった者として、何であるかを語れないようでは話にならないと思っていたからである。確かに三愛精神を語る人はいたが、その多くは感動をもって受け入れることは難しく、耳に心地良くてもいつの間にか消えていくのであった。しかし、社会に出た卒業生に会ったとき、彼らの話しの端々に、はつきりと見えないまでも三愛精神を感じるが多々ある。その時は酪農学園大学の教育の力を感じ、建学の精神は受け継がれ、生きているとのうれしさがこみ上げてくる。同時に、このような気付きを通して自分の中に育つ

ている建学の精神にハツとし、やはり酪農学園大学に育てられ生かされてきたと痛感するのであった。

酪農学園の今後のさらなる発展を、心を込めて祈りたい。

小山 久一（こやま ひさいち） 略歴

- 昭和22（1974）年9月 北海道伊達市に生まれる
- 昭和47（1972）年3月 酪農学園大学酪農学部酪農学科卒業
- 昭和50（1975）年3月 岩手大学大学院農学研究科修士課程修了
- 昭和50（1975）年4月 酪農学園大学助手
- 昭和53（1978）年4月 酪農学園大学講師
- 昭和63（1988）年4月 酪農学園大学助教授
- 平成2（1990）年3月 農学博士学位取得（広島大学）
- 平成3（1991）年8月 米国・コーネル大学客員准教授（1年間）
- 平成9（1997）年4月 酪農学園大学教授
- 平成13（2001）年4月 酪農学園大学酪農学部酪農学科長（2期4年間）
- 平成17（2005）年4月 酪農学園大学・酪農学園大学短期大学部教務部長（2期4年間）
- 平成23（2011）年4月 酪農学園大学・酪農学園大学短期大学部図書館長（2期4年間）
- 平成25（2013）年3月 酪農学園大学定年退職
- 平成25（2013）年4月 酪農学園大学教育センター特任教授
- 平成27（2015）年5月 酪農学園大学同窓会校友会会長
- 平成27（2015）年5月 酪農学園同窓会会長

発 行 酪農学園大学同窓会校友会
住 所 北海道江別市文京台緑町582番地
電 話 011-386-1196
発行責任 酪農学園大学同窓会校友会
事務局長 加 藤 清 雄
発 行 2016年2月
印 刷 社会福祉法人 北海道リハビリ一
電 話 011-375-2116